

「小中学生の親に向けて講演してもらえますか？」そんな話が突然舞い込んできた。11月に行われる江東区大島地区のPTA向けの講演会に呼ばれたのだ。きっかけはなんと、国語科のO先生が外部で『いきもの記』を紹介してくれたこと。なんとも嬉しいご縁だ。「それならばぜひ生徒を登壇させてください！」とむしろこちらからお願いし、このたび、『高校生による大人向けの講演会』が実現した。

テーマは「青少年育成」と「地域連携」だ。いつもぼくは生徒に無茶振りをしがちだが（すみません）、今回はかなりきつい無茶振りだ。だって「青少年育成」を「青少年である高校生が語る」のだ（絶対面白い）。そんな無茶振りにも、鳥班のホノカやミフミが「面白そうだからやってみたいです！」と即答する。何とも頼もしい（ちなみに、強制はしない主義なので、ホノカたちが躊躇ったらこの話はナシにするつもりでした）。

威勢よく承諾したものの、いざ内容を考え始めたら、これは何とも難しいぞと悟る。当たり前だが、生徒たちは「親視線」なんて考えたことない。みんなで頭を悩ませながらも「どうして自分たちが鳥好きの『鳥野郎』になったのか」や「自分をどう育てたのか親にインタビューしてみる」というアイデアが自然と出てくる。それはぼく自身もきみから聞いてみたい！と思ったので即採用。さらに西表島メンバーの1年生なども加わり、西表島に行ったからこそ分かる「『遠い自然』と『身近な自然』の関係」や「都会でのいきものとの関わり方」という深い話題も取り入れた。少し手助けしたものの、気付けば自分たちで発表スライドを完成させていた。繰り返しになるが、本当に頼もしい。

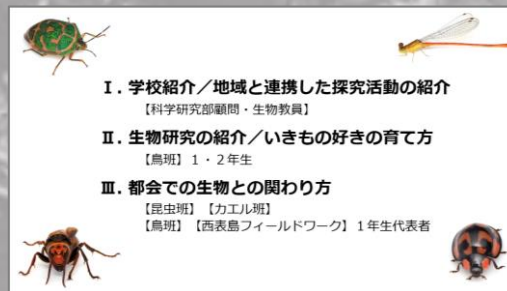
ここ数年、地域連携というものに興味を持って、本当にたくさんの方たちと連携をさせてもらっている。都市公園を舞台に高校生が活躍して学校と地域がつながり、**高校生が大人たちを動かしている**。この講演会の後、ある小学校からは「学校のビオトープの再生活動と一緒にしませんか」と誘われ、他の小学校からも「高校生に授業してもらいたい」と要望をいただいた。さらに輪が広がっている。

無論、講演は大盛況で、「今までの講演会で一番良かった」との評価をいただいた。45分の講演に
対し、**質疑応答が40分間も続き大盛り上がりだった**。

本来ならば、この講演会の趣旨は、青少年の育成について“親たちが”学びを得ることだと思うが、今回はそれに加えて、講演会に高校生が登壇することで、「青少年たる**“高校生が”**成長する場」になっている。本当に素晴らしい機会をくださった。関係していただいた皆様、ありがとうございました。

※当日の動画があるので見たい方は佐藤まで。

参考：盛口満 (2016), 自然を楽しむ-見る・描く・伝える-, 東京大学出版会



発表の目次 科学研究部の代表者がプレゼンした。



小中学校のPTAに向けた講演会に生物班の生徒が登壇した（11月16日）大人向けに何を話すか悩みぬいた結果、鳥班は『鳥野郎ができるまで』というタイトルで、自分の生い立ちを紹介した。この他にも、猿江公園を利用した生物研究の紹介も行い、『地域を生かした活動』について高校生の立場で語っていた。ホノカは突然「鳥の鳴き声のマネをします」と言って口笛を披露していた。度胸ありすぎだろ～！当日の参加者は、6校の小学校と3校の中学校の保護者、大島地区子ども会連合会、青少年対策大島地区委員会、大島地区小中PTA協議会の方で、およそ60名が聞いてくださった。この講演会は、自分の子どもや地域の子をどう育成するかという視点で行われた。



ミフミは『どうしたら興味が深まるのか』というテーマを話した。面白いのは、講演のために「自分をどう育てたのか」と親にインタビューしたことだ。カエル班のタクムのプレゼンでは、小さい頃に「どんなに小さな生き物でも同じ命を持っている」と親に言われたことが強く心に残っていて、それが今の興味にも繋がっていると語った。苦手で命に敬意をもってほしいというメッセージは、大人には結構響いたんじゃないかな。



西表島研修に参加したルイは、都会の人は「自然といえば西表島のような豊かな環境」と考えてしまっていて、都会の生き物を軽視しているのではないかと主張。「身近な自然も不思議だらけで面白い」という言葉は、まさにこの「いきもの記」の発行理念にも通じるものがある。